

桑名港の材木と船頭平閘門

西羽 晃

前回に桑名港に入ってきた材木は紀州半島の牟婁郡からが多く、「木曾三川上流からの材木はどうなったのだろうか」と疑問を呈していたが、それについて私なりに推測してみる。

江戸時代の木曾山林の材木は木曾川を下ってきた。一部の筏は木曾川から分れる鰻江川を通り、長島の又木に貯木された。明治になって桑名城は廃止となり、城跡は民間に払い下げられた。明治9（1879）年に本丸跡の大部分を政府が買い上げて、同12年に本丸堀を利用する官営貯木所が開設された。同14年には農商務省の管轄となり、同22年に御料地（天皇家の土地）となった。管轄の名称は御料局・帝室管理局と変遷したが、大正3（1924）年から帝室林野局となった。木曾山林は江戸時代は尾張藩の所有であったが、明治維新後は政府の所有となり、帝室（すなわち天皇家）の管轄となった。それに応じて桑名貯木所も帝室の管轄となったのである。桑名港の管轄外のため、港の統計には含まれないと私は推定している。ただ民間の材木は三之丸堀などに貯木されたので、桑名港の統計に含まれているのであろう。



明治時代の三之丸堀

従来は木曾川上流からの物資・材木は船や筏によって、油島開口部・鰻江川・青鷺川を通過して桑名へ運ばれていた。しかし木曾三川改修工事により、油島開口部・鰻江川・青鷺川も締め切られ、木曾川と桑名港を直接に結ぶ水路がなくなり、一端伊勢湾へ出て、揖斐川を遡上しなければならなくなった。そのため、明治26年5月19日に、桑名の有力者たちが閘門の設立請願書を国会に提出した。請願書は国会で承認され、政府も閘門の設置を愛知県立田村（現愛西市）福原船頭平に設立することになり、同32年10月に工事を開始した。同35年5月に完成し、船頭平閘門と名付けられた。最盛期には船や筏の通行が多く、日の出から日没までの開門だったが、1日では捌ききれない時もあったという。

上流にダムが出来たり、鉄道によって材木が輸送されるようになり、材木の筏も桑名へ来なくなり、帝室林野局桑名貯木所は昭和の大戦後に廃止された。

なお、船頭平閘門は90年余り、大きな扉を人間の手で開閉できる手動式だったが、平成6（1994）年に電動に改められている。現在も時々開閉される。国指定重要文化財となっている。



現在の船頭平閘門